

東大門

この堂々たる門は西院伽藍から、聖徳太子の死後にかつて暮らしていた場所に拡張された東側伽藍へ通じる参道の途中にある。門の来歴は不明だが、1944年の解体修理の際に発見された部材のしるしから、もともと鏡池の東側にあった南向きの門だったものを、平安時代に移築し東西に通り抜ける門としたことがわかった。東大門は奈良時代（710～794年）の建築の素晴らしい作例のひとつである。特に、南北に通る棟木が両脇と中央の三本ある三棟造りという形式になっている。